

北京語と漢文

佐々木恒平

能力主義

現代の日本では格差社会が進んでいて、世の中は勝ち組と負け組に二分されているという。そこで、社会で成功するためには何が必要か、という質問に対して、能力があるかないかがそれを決めるのだ、という答えが返ってきたりする。いわゆる能力主義である。

しかし、能力という言葉ほど嫌なものはない。なぜといって、そんなものがどこにあるのか分からないからである。目に見えないものがある、と言われると、何も言い返せなくなってしまう。それがないという証拠がないので、あるはずがない、とは言えないのである。

能力があるから社会で成功するのだ、と言うが、では、ある人に能力があるということがどうして分かるのか、といえば、その人が社会で成功したから能力が証明されたのだ、という話になる。つまりトローゾーである。成功したから成功したのだ、と言っているのと変わりが無い。これは一種の詐欺だと思う。

たとえば、占い師に誰にでも当てはまるようなことを言われると、なんとなく自分のことが言い当てられているような気分になってくる。それがトリックかもしれない、ということは分かっているのだが、しかし、それが予言の力によるものではない、という証拠もないのである。それで、なんとなく話を聞いているうちに、だんだん騙されて

ゆくわけである。

私はこれを反証不可能性の詐欺と呼んでいるが、能力という言葉も同じ手口だと思う。能力がある、と言われると、それを否定することができないので、なんとなくあるような気になってくる。それで、能力がないから負け組なんだ、と言われると、そうかもしれない、と納得してしまう。つまり能力という言葉は、そういうふうに人をだませる人間だけが出世するのだ、ということの意味しているにすぎない。こんな言葉が大手を振ってまかり通るようになったのだから、日本社会もだいたい腐ってきたようである。

ついでに言うておくと、精神医学やキリスト教もこれと同種の詐欺である。気をつけてほしい。

懐疑主義

まことしやかに語られている話だが、エジソンは子供のころ学校の先生に、一足す一がどうして二になるのか、と質問したとされている。そしてこの話を、常識を疑うことの重要性を示す話だとして、喜んで引用する人々がいる。

だが、エジソンが本当にそれを疑っていたとは考えられない。一足

す一が二であることを理解できなかったのだとすれば、一個一ドルのリングを二個買うときに、三ドル払っていたはずである。そんな人間が金持ちになれるはずがない。エジソンは子供のときから、一ドルのリングを二個買うときには、きっかり二ドル払っていたはずである。もしかすると値切ろうとしたかもしれない。

つまり、はじめのエジソンの質問は、学校の先生を困らせるために言ったことであって、エジソンの根性がねじ曲がっていることを示しているに過ぎない。だから、こんな話を持ち上げるべきではない。

世の中には懐疑主義者というものが多いようで、何かという常識を批判したり、学校の授業を批判したりする。そういう人は、教育は洗脳の一種だ、と言ったりする。しかし、一足す一が二であることを子供に信じ込ませることは、洗脳ではない。一足す一が三であると信じ込ませるならば、それは洗脳である。つまり、間違った知識を信じ込ませることが洗脳であって、正しい知識を信じ込ませることは洗脳ではない。それは教育である。

懐疑主義者の不思議なところは、懐疑主義そのものを疑わないことである。何もかもを疑うという態度の正しさを、絶対的に信じているわけである。しかし、どんなことにも疑問を持つことが大事だ、というのは間違いである。正しい考えならば、そのまま信じたほうがよい。

芸能人の不祥事について

1

ピエール瀧がコカインをやっていたなんていうニュースを、わざわざテレビでやる必要はないだろう。ピエールが一生に一度も麻薬を

やったことがない、というのであれば、ニュースにする価値はあるかもしれない。だが、ピエールがコカインをやっていたという話には、なんの意外性もない。やっつてるに決まってるじゃないか、としか思えない。

そんなことまでニュースにするマスコミというのは、どうもおかしいのではないか。芸能人とか芸人とかいう連中は、もともと半分やぐざみみたいなものだから、彼らが影でこそ何をしていたように、誰も驚きはしないだろう。放っておけばよいのではないか。

芸人というのは、根も葉もない話をもっともらしく、面白おかしく語るのが仕事なのであって、四六時中嘘をついているような人々である。ロンドンブーツが嘘をつくはずがない、なんてことがあるだろうか。むしろ嘘しかつかないだろう。嘘の話で詐欺師を笑わせて金をとっているのだから、詐欺師以上の詐欺師である。その後べそをかいて見せて、国民まで騙している。ろくでもない連中である。

世の中で普段から嘘をつく人種は芸能人と政治家くらいのもので、普通の人間にはなかなか嘘をつく機会などない。社会に嘘つきが増えたと世情は不安なものになる。百人に一人でも嘘つきが混じれば、その社会に未来はない。すべての悪事は嘘をつくことから始まる。だから、世の中の悪いことの半分くらいは、テレビが作ったものである。

最近は大真面目にこういう注意をする大人も少なくなったが、テレビを見ると馬鹿になるといえるのは、たしかに真理である。

2

ニュースというものは客観性を重んじるのかもしれないが、客観性と無責任は違う。

以前、地方のアイドルが過労で自殺した、という事件があった。それを取り上げたニュース番組のアナウンサーが、かわいそうですね、みたいなことを言っていたと思う。他に言うことはないのだろうか。そもそも、今のアイドルブームを作ったのはテレビではないか。そのブームに乗っかって多くの若者がアイドルを目指し、その中から過労で死ぬ者まで現れた。その責任の一端は、テレビ局にもあるはずであらう。

自分のテレビ局で未成年のアイドルをさんざん働かせておきながら、いざアイドルが死ぬと他人事のように、かわいそうですね、と言う。他に言うことはないのだろうか。彼らは、ニュースの客観性と、自分の行為を反省しない無責任さとを、取り違えているのである。ニュースばかり見ると嘘つきになるぞ、と私は言いたい。

3

京アニ事件の報道などを見ると、アニメは日本を代表する文化だということを、いまだに認めようとしない人がいることに気がかされる。しかし、海外から見れば日本はアニメの国であり、そのイメージを我々は受け入れるしかない。それを拒否するほうがむしろ子供っぽく見えるだろう。

アニメなんてくだらない、子供の娯楽だ、と言う人がいるかもしれない。しかし、だからこそ文化としての価値があるのではないか。日本のアニメはくだらないからこそ世界で愛されている。それを誇りに思う必要はないが、そういうものとして受け入れてもよいのではないか。

日本人のアニメに対する冷淡さは、私にはどうも理解できない。

北京語と漢文

1

最近の研究によれば、中国人の話し言葉は、南北朝から隋・唐の時期にかけて、大きく変化したらしい。そのころに、北方の遊牧民が中華の平原地帯に大量に流入し、中国語の発音が全く変わってしまったらしいのである。

一方で、漢字そのものは変化していない。漢字の文章の使い方は、話し言葉の変化からは独立していたと考えられる。そのことは、漢字という書き言葉が、話し言葉からは独立した構造を備えていたことを示している。書き言葉と話し言葉が元々別のものであったため、話し言葉が変化しても、書き言葉が同じように変化することはなかった。つまり、中国においては、話し言葉と書き言葉は別の言語だったのである。

そう考えると、北京語という言葉の異常性が際立つ。現在の中国人は北京語を使い、共産党によれば、その識字率は九割を超えていると言う。だが、中国の歴史を通じて、識字率は一パーセントにも満たなかったはずである。漢字はエリートのものであり、漢字を使える人間は、庶民とは別の生き物のように扱われてきた。

そもそも、漢字の発祥は甲骨文字だと言われている。によるよろした文様のようなものが、段々と現在の漢字の姿に変化してゆく図を、教科書などで見た覚えのある方も多いだろう。しかし、そのような漢字の変化が、自然に起きたはずはない。

いま我々が使っている漢字は、形が定まっている。亀という漢字には、亀という形しかない。だが、漢字が自然発生的に生じたのだとすれば、はじめは様々な形があったはずである。地域によって人によつ

て、使う漢字には多様性があったと思われる。それが一つの形に定められたということは、自然に起きることではない。誰かが、それを一つに決めたのである。

それが始皇帝だと言われている。いわゆる焚書坑儒は、異字体で書かれた書物を全て焼くことで、漢字の字体を統一する意味があったのだと、現在では考えられている。漢字は中国そのものである。ゆえに、漢字を作った始皇帝は、中国を作った人物だと言われるわけである。

しかし、その時にはまだ、話し言葉は統一されていなかった。中国人は、地域ごとに様々な言葉を話していたのである。ゆえに、もしも、北京語を話す人間を中国人と呼ぶのであれば、その頃には中国人はいなかったことになる。同一の言語を話す集団を国民と呼ぶのであれば、中国人という国民は、いまだかつて存在したことがなかった。それは、二十世紀の北京語の創造とともに、新しく生み出された民族である。

また、話し言葉がバラバラであったのに、書き言葉が種類しかなかったということは、書き言葉はやはり、どの言語とも対応しないものであったことになる。だからこそ、それを学ぶということは非常に大変なことであった。現代で言えば、プログラミング言語の習得に近いかも知らない。中国人の識字率が低かったことには、そのような理由があったと考えられる。

北京語の出現によって、その状況ががらりと変わってしまったのだとすれば、それは、有史以来の革命的な出来事である。北京語が言文一致を実現し、それによって漢字を学びやすいものにし、さらに、話し言葉の統一を成し遂げたのだとすれば、始皇帝以来の偉業だと言える。中国共産党は、中国に真の革命を起こしたのかもしれない。

もちろん私は、共産党の発表をそのまま信じているわけではない。

識字率の発表は肩唾ではないかとも思う。また、北京語が本当に言文一致を実現しているかどうかとも知らない。そもそも私は、北京語が分からないのである。

2

現在でも、中国人の使う言葉は地域によって違う。それを方言と呼ぶのは、一種の作為である。しかし清朝の役人が、英語やフランス語ですら方言と呼んでいたことからすると、方言という熟語は、話し言葉という程度の意味だったのかもしれない。漢字とは、話し言葉の区別を超越した普遍的な言語である、という感覚が、現代人に欠如していることが本場の問題なのだろう。

歴史上、漢字を使える中国人はほとんどいなかった。であるならば、漢字や漢文を学ぶことが、中国人の特権だと考えるべき理由もない。漢文は中国語ではない。なぜなら、中国人には漢文が読めないからである。だから、日本人が漢文を学んでもおかしくない。むしろ日本人ならば、漢文くらい読めなければいけない。

最近の日本語が、論理的ではないと言われることが多いのは、日本人が漢文の勉強を怠ってきたからであろう。本来、漢文の素養なしに、日本語を使いこなすことはできない。特に、日本語の論理的な表現は、漢文の表現に負うところが大きい。そのため、漢文の教育をもっとしっかりやったほうが良いと思われる。

日本の教育には言いたいことが色々あるのだが、漢文教育の必要性は強調しておきたい。極端な意見だと思われるかもしれないが、私は、数学教育は必要ないと考える。数学教育は何の役にも立たない。ただの権威主義である。

いまの日本で、なぜ子供に数学を教えるのかといえば、それは、ヨーロッパの真似をしているからである。では、なぜヨーロッパで子供に数学を教えるのかといえば、プラトロンがそう言っているからである。プラトロンは『国家』という書物の中で、子供の教育には数学が一番良いと言っている。ヨーロッパ人は、それを真に受けているだけである。それは、権威主義以外の何物でもない。

だが、プラトロンは間違ったことしか言わない人である。プラトロンが間違っていることの証明は、別の論文で与えている。だから、数学教育を行うべき理由はない。代わりに漢文を教えたほうが良い。それが私の意見である。

3

日本の教育の一番の問題点は、歴史教育にある。東京裁判の判決を歴史的な事実として受け取り、それを子供に教えるということは、日本人の知性に測り知れない悪影響を与えている。

東京裁判において原告側が主張した、日本の政治家や軍の高官たちによる共同謀議というシナリオは、荒唐無稽であり、ただの妄想に過ぎない。むしろ共同謀議の疑いは、アメリカ政府の高官たちに向けられるべきである。また、原告に有利な証言は信憑性を確認せずに採用されたのに対して、被告側に有利な証拠はほとんど却下されたということも、裁判の正当性に疑問を抱かせるのに十分である。裁判の内容に全く注意を向けずに、その結果だけを無批判に受け入れるということは、そのこと自体、人間の理性に対する冒瀆である。

アメリカ人の下らない妄想を本当の歴史だと信じ込んでいるために、日本人の知性は、彼らと同じ程度にまで退化してしまった。これこそが、日本にとって最大の不幸である。

韓国併合

安重根は、天皇陛下のために伊藤を撃った。陛下の御心は正しいものであるが、伊藤のような奸臣がそれを歪めている。だから、伊藤を撃って政治を正そうとした、というわけである。彼の言い分は、基本的に二・二六の将校たちと変わりがない。かの将校たちが忠義の士とみなされるならば、安も同様に評価されねばならない。

彼の考えから理解できることは、西洋の侵略に抵抗するために、朝鮮人と日本人は力を合わせねばならない、という認識が、当時の朝鮮人の間に存在したということである。これを前提としなければ、日韓の併合が大した抵抗もなく実現された理由は理解できないだろう。

日本による韓国併合は、本質的には日韓同盟であったのだと思う。それは、西洋列強に対抗するための、東洋人同士の同盟である。それが一方的な併合という形をとったことは、ある意味では日本の落ち度であり、ある意味では必然であった。

本当の問題は、それが植民地支配であったかどうかということではなく、その結末である。日本が朝鮮を一方的に支配していたのであれば、その分だけ、日本には朝鮮を安堵する義務があったと言える。朝鮮人が日本による支配を受け入れたのは、欧米人に対する防衛のためであり、つまり、朝鮮の平和を守るためである。その目的は、達成されたと言えるだろうか。

日本が韓国に対して何らかの罪を犯したのだとすれば、それは、朝鮮戦争を防げなかったことであろう。この点から見れば、日韓同盟は失敗したと言える。朝鮮は戦場となり、平和は破られてしまった。日本は義務を果たせなかったわけである。

このことに関して、日本は韓国に謝罪すべきなのかもしれない。

それは、韓国を鬼畜の手に渡してしまったことへの謝罪である。日本人は、アメリカ人のように朝鮮人を殺したわけではない。

一方で、北朝鮮と韓国がどちらも独立を保っていることを考えるならば、日韓同盟も完全な失敗ではなかったのかもしれない。

アメリカ人の戦争観

1

戦争において重要なのは、勢いを味方につけることである。日本がアメリカを相手に長期間戦い続けることができたのは、相手の出鼻をくじいたことが大きい。真珠湾の成功で日本軍に勢いにつき、戦果が拡大した。それを取り返すだけで、アメリカは相当の労力を払わねばならなかった。

当時の日本とアメリカの国力の差は、一対百とも、子供と大人とも形容されるほど大きなものだった。その日本を降伏させるのに、アメリカは足掛け五年もかかったのである。しかも、日本の首都を占領することすらできず、一部の島嶼地域しか占領できなかった。

客観的に見れば、これは大失敗である。しかしアメリカ人は、これを失敗だと認識できていない。それが問題なのである。

もしもアメリカが、真珠湾に先んじて日本に攻撃を仕掛けることができたならば、沖縄を占領するまでの時間はもっと短縮できたであろうし、そのまま東京を占領することも不可能ではなかっただろう。あの戦争をアメリカの勝利だと考える人間には、戦略の知識が欠如していると言わざるをえない。

航空機による爆撃と地上軍による占領とでは、その持つ意味は全く異なる。空爆のみを行って占領を行わなかったのだとすれば、全ての弾薬が無駄になったのだと言ってもよい。空爆によって相手に与えたダメージは、占領によって確実な成果とされねばならない。アメリカ軍は、すんでのところで勝利を逃したのである。

では、なぜアメリカ軍が、最後まで戦争を遂行せずに日本の降伏を受け入れたのかといえば、既に述べたように、そもそもトルーマンに戦争を続ける動機がなかったからである。はっきり言って、アメリカという国家には戦争を遂行する能力はない。

2

そもそも、日本が降伏したのは原子爆弾のせいではない。もちろん間接的な影響はあっただろう。しかし直接には、天皇がやめると言っただから、やめただけである。おそらく、天皇がまだまだ続けると言えば、日本人は戦いを続けただろう。

そのところが、どうもアメリカ人には分かっていないらしい。戦争の総括が上手くできていないらしいのである。それで彼らは、圧倒的な火力で敵を押しまくれば戦争に勝てる、と思い込んでいるふしがある。

しかし、ベトナムでも朝鮮でも、大量の武器弾薬をつぎ込んで破壊の限りを尽くしたのに、アメリカは負けたのである。少なくとも、勝てなかった。それはなぜかと言えば、火力で押しまくれば勝てる、という基本的な発想が間違っているからなのだが、彼らはそのことに気が付いていない。太平洋戦争の成功体験に目が曇らされて、現実を見ることができなくなっているのである。だが、彼らが考えるほど、戦争は単純ではない。

日本人はわりと戦争に慣れてるので、自発的に戦争をやめるとい
う判断ができる。あんまり頑張りすぎて損害を大きくするよりは、適
当なところで降参したほうがいい、という判断ができるのである。そ
の判断にアメリカは救われたのだが、日本人以外の民族に、そのよう
な判断ができるとは限らない。

アメリカ人の議論にはどうも空想的なところがあって、原爆を落と
せばどんな相手にも勝てる、と思い込んでいるふしがある。けれど
も、それが倫理的に正しいのかどうか、というところで決心がつかな
いらしい。しかし、そもそも原爆を落とせば勝ると決まっているわ
けではない。彼らが原爆で勝てたのは、日本が相手だったからであっ
て、他の国が相手の場合にそれで勝てるとは限らない。

戦争というのはゲームではなく、人の命がかかっている。なので、
適当なところでやめる、ということも重要である。こういう言い方は
卑怯かもしれないが、降参することも一つの戦略なのである。負けた
からといって、全てが終わるわけではない。だから、その先のことま
で考えて判断しなければならぬ。

何が言いたいかというと、アメリカ人が世界中で暴虐の限りを尽く
していることの、責任の一端は日本にもある。破壊によって勝利がも
たらされる、というアメリカ人の戦争観を作り出してしまったのは、
日本との戦争が原因なのである。だから我々は、何とかしてアメリカ
人の目を覚まさせてやらねばならない。それが日本の責任である。

満洲事変について

中国人が満洲事変に驚いたのは、まさかそんなことができると思
っていなかったからである。

当時の関東軍の兵力は一万足らずで、装備は旧式だった。対する張
学良の軍勢は十数万と言われ、装備の面でも優れていた。このような
状況で、日本側が事を起こすとは誰も思わなかったし、ましてそれが
成功するとは考えられなかっただろう。

それが可能になったのは、一つには、満洲という地域が近代化され
ていたからであり、二つには、現地の日本人の全面的な協力のおかげ
である。一般の日本人の協力のもと、関東軍は満洲一帯の通信と交
通のシステムを一気に押さえ、敵側の連絡手段を奪った。それによっ
て、あつげなく勝負が決まったのである。鉄道や電信技術が整備され
ていただけに、そこを押さえられると手も足も出なくなってしまう。
まさに近代的な戦争であった。

もう一つの重要な要因は中国側の慢心であって、これ以降、日本軍
は容易に中国人に勝てなくなる。兵力に差があっても油断してはなら
ない、という教訓を中国人に与えたのである。

また、おそらく毛沢東の戦略は、この経験から学んだものである
う。土地の住民を味方につけてゲリラ戦を行う、という発想は、満洲
事変の発想に近い。寡兵をもって大軍を倒す方法を、彼は日本人から
学んだのだろう。戦場では、敵が最良の教師となるわけである。

日本人の道徳

1

聖徳太子は十七条憲法の第二条で、仏法は「万国の禁宗」であると
述べている。これは、仏法が、あらゆる国に通用する普遍的な法であ
ることを宣言しているのである。

太子はこの認識に基づいて、隋の皇帝に「日出処の天子」から始まる有名な国書を送った。皇帝の反発によってこの試みは失敗に終わったが、国書の目的は、日本と中国の対等な関係を実現することであったと考えられている。つまり太子は、万国に通用する普遍的な法に基づいた、国家間の対等な外交関係を求めたのである。これはまさに、近代的な国際関係の理念そのものではないだろうか。

近代とは、普遍を求めた時代であったと言えるだろう。西洋人は自分たちの文化こそ普遍的なものであると考え、彼らの法によって世界秩序を構成することを夢想した。そして、そのような理想を、飛鳥時代の日本人もまた共有していたのである。

日本という国は、普遍的な法という理念のもとに建国されたのである。歴史が始まって以来日本人はそれを追求し、また実践し続けてきた。普遍を追求することが近代であるならば、日本は建国以来つねに近代国家であり続けたのである。

彼らはやがて十九世紀になると、同じように普遍を求める西洋人と出会うことになる。だが、両者の求める普遍は互いに食い違っていた。両者とも初めはその違いに気付かなかったが、だんだんとそれが深刻な対立を生じさせるようになった。

どちらが正しかったのかといえば、もちろん日本人の方が正しかった。なぜならば、西洋人の普遍とは、常に例外を認める類のものであったからである。たとえば、第二十八代アメリカ合衆国大統領ウッドロー・ウィルソンが表明した民族自決の原則は、明らかに有色人種をその対象から除外していた。そのことは、パリ講和会議において日本代表が提案した人種差別撤廃案を、ウィルソンが拒絶したことからも理解されることである。

西洋人の提案する法は、たしかに文言の上では普遍的である。しか

し、彼らがそれを実践して見せたことは、今までに一度もない。その法が表現の上でどれだけ普遍的であったとしても、その運用が恣意的なものであったならば何の意味もない。普遍的な法とは、その実践においてこそ普遍性が発揮されるものでなければならぬ。それが、普遍に対する日本と西洋の考え方の違いであった。

人間が従うべき法には、いかなる例外も認められない。ゆえに、それは非常時においてこそ守られねばならないものである。非常事態だからといって例外を認めてしまうようでは、普遍的な法を実践しているとは言えない。そして、人間にとって最も身近でかつ切迫した非常時とは、戦争である。よって、戦争の中でどれだけその法を守り通せるかが、人間の価値を測る尺度となる。戦場において法を実践できる人間こそが、最も道德的な人間であり、また最も優れた人間である。したがって、戦争というものは、人間にとって最も文化的な活動でなければならぬ。それが、武士道の目標とするところである。

それは、法の普遍性をいかに個々の人間が実践しうるか、という追求の道である。そして、そのような追求の末に実現される究極の法こそが、仏法である。人類が経験するあらゆる歴史的な事象はすべて、普遍的な法としての仏法をこの世界に実現するための手段である。それは、普遍に関する言辞を弄ぶことによってではなく、個々の人間の実践を通してのみ実現されるものである。それが、万国の禁宗という太子の言葉の意味であり、また、日本の国体そのものである。

以上のような日本人の道德観を前提とするならば、戦争だからといって法に例外を設けてしまうようなことを、日本人が最も忌み嫌うことは容易に理解できるだろう。そのような間違いを日本人の目の前で犯して見せたのが、極東国際軍事裁判、いわゆる東京裁判である。この裁判において連合国は、自分が定めた法の対象から自分自身を

除外してしまつた。戦争犯罪を裁くための法を、連合国自身に適用することを怠つたのである。そして連合国とは、実質的にはアメリカであつた。おそらくこの裁判によつて、アメリカ人は鬼畜である、という評価が日本人の間で確立したのだと思われる。

鬼畜という言葉は、人間以下の存在を意味している。仏教では六道輪廻といつて、この世界を六つに分けて考える。一番上が天道、二番目が人間道、三番目が阿修羅道、四番目が畜生道、五番目が餓鬼道、六番目が地獄道である。このうち、畜生道と餓鬼道をまとめて鬼畜と言う。この言葉には、軽蔑と憐みのニュアンスが込められている。仏の知恵の届かない暗黒の世界またはその住人、というほどの意味である。アメリカ人には法の普遍性を理解する能力がない、つまり仏法を尊ぶ知性がない、という判断が、鬼畜という言葉で表現されるわけである。

日本人は、アメリカ人の命に何らの価値をも見出していない。アメリカの若者が戦場でどれだけ命を落とそうと、日本人は悲しみも喜びもしない。全く何の関心も示そうとしない。これは、そのようにアメリカ人の血によつて購われている世界秩序に日本がただ乗りし、今ではそれを使い潰そうとしていることから分かる。日本人にとつて、それは使い捨ての道具に過ぎない。同情の対象とはなりえないのである。アメリカ人は、日本人に搾取されていることに気付くべきである。もつとも、もう手遅れかもしれないが。

このようなことは、日本人は決して口に出しては言わない。しかし、誰もがこれを理解している。ヨーロッパは暗黒の世界である。いつ終わるとも知れない争いを休みなく続ける無知と怠惰と暴力の世界である。そのような無間地獄の中でもがき苦しむ這いずり回るヨーロッパの人々を、我々は知恵の光によつて救い取らねばならない。そ

れこそが、現代を生きるアジア人の使命であろう。

2

しかし、もしも、西洋人に向かつて、我々はあなた方を救おうとしているのだ、と言えば、彼らは我々をあざけり、怒りをぶつけてくるだろう。

例えば、あなたの友人がマルチ商法に騙されているとしよう。あなたは彼に、そんな話は嘘だから今すぐやめたほうがいい、と言つたでしょう。そうすると彼はあなたのことを嘘つきだと言つて、あなたの話を否定しようとするだろう。詐欺というのは、騙される人間がいるから成り立つのであつて、本当に騙されている人間には、自分が騙されていることがなかなか分からない。

キリスト教徒もそれと同じである。彼らは理性が混乱しているのだ、あべこべに我々を詐欺師だと言うだろう。そういう人々をどうにかなだめすかしてこちらの言うことを聞かせてやったとしても、我々にはほとんど何の利益もない。放つておいたほうがましかもしれない。

それは苦勞ばかりが多く、まったく報われない仕事である。利に聡い日本人は、そのような仕事を今までずっと避けてきた。しかし、もう限界である。我々は教育を始めなければならない。

マルクスは、「宗教は民衆のアヘン」だと言つたが、それは正確ではない。正しくは、キリスト教はアヘンだ、と言うべきであつた。なぜならば、キリスト教は宗教ではないからである。宗教とは仏教のことであり、それ以外の宗教は誤つてそう呼ばれているに過ぎない。あらゆる迷信と邪な考えを滅ぼし、正しい考えを広めることが仏教である。

すべての宗教は滅ぼされねばならない。

すべての嘘と偽りは滅ぼされねばならない。
すべての詐欺師と予言者は滅ぼされねばならない。
これが我々の教育である。

善と利益

1

日本人が利に聡いと言うと、不審に思う人もいるかもしれない。日本人は人がいいので損ばかりしている、というイメージを持っている人もいるだろう。

しかし、善を為すほど利益になることはない。善を為すほど、人の立場は強まる。悪事を為して利益を上げようとする人間は、その言い訳をしなければならなくなる。それだけでも、彼の立場は弱まる。また、そういうことを続けていると信用を失うので、商売がしづらくなる。一方で、悪事を為さない人間は、誰かに言い訳をする必要はない。また、人から信用され、黙っていても商売の機会が回ってくる。だから、善行は利益になると言える。

これを不純と考える人もいるかもしれない。自分の利益のために善を行うのは本当の善ではない、という意見もあるだろう。しかし、目的はどうあれ善行は善行であって、そこに差別はない。善行の中に善い善行と悪い善行があるというのは、矛盾した考えである。

逆に、善行が自分の利益になると確信していない人には、大した善行はできない。そういう人は、自分の良心を慰めるために慈善事業を始めた募金をしたりするが、それが自分の利益にならないと考えているから、できるだけ節約しようとする。つまり金をケチる。最小の

支出で最大の慰めが得られるやり方が一番良い、と考える。だから、大した善行はできない。むしろ、それが自分の利益になると確信している人のほうが、ちゃんとした善行ができる。ゆえに、善行が利益になるという考えは、それ自体が善いものであると言える。

それは、善行を消費として捉えるか、それとも投資として捉えるか、という違いだとも言える。ここまでの議論が正しいならば、それはノーリスク・ハイリターンの投資である。

日本人はそれが分かっているのに、悪事を嫌い、善を好む傾向がある。なので、短い期間で見ると損をしているようだが、長い目で見れば得をすることになる。そのため、利に聡いと言える。易経には「積善の家には余慶あり」とあるが、そのとおりである。

2

しかし、そのことを忘れてしまうと、日本人はただ利益のみを求めるようになる。もう使われなくなった言葉だが、いわゆるエコノミック・アニマルというのは、そういうことだろう。

善行と利益の結びつきを忘れると、自分の利益だけを求めるようになる。そして、ただ利益だけを貪るようになると、恐れが生まれてくる。よく善を為し、自分の心に疚しいところがなければ、何かを恐れる必要はない。しかし、善を怠ると弱みが生まれる。人から非難されないかどうか、自分の過ちを指摘されないかどうか、という不安が生まれ良心が傷つく。それが理由のない恐れを生み、そこから攻撃的な言葉や行動が生じる。

明治以来の日本においてよく見られるのは、朝鮮人への恐れである。関東大震災などの非常時に、そうした恐れは表面に出てくる。最

近でも世情の不安から攻撃的な言辞がよく見られる。そういうことをする人々は、不良日本人と言うしかない。

善を怠るから疚しさが生まれる。心に疚しいところがあるから人を恐れる。人を恐れるから攻撃的になる。そして、それがまた良心を傷つける。悪循環である。

そもそも初めに、善は利益を生む、という信念が欠けていることが問題である。しかし、これは簡単に解決できることではない。必要なのは教育であり、様々な方法でそうした信念を育むことである。心ない人はそれを洗脳だと言うだろう。現世利益という考えを非難する人もいる。しかし、そうした人々に従っていても、何の解決にもならない。

あらゆる人間は善を為すべきである。自分の利益とともに、他人の利益をも求めなければならない。善行は利益を生む。それは、自分にも他人にも等しく利益をもたらす。

これが我々の信仰である。我々はこの信仰を広め、守り抜かねばならない。

3

もしも、一度でも死んだことのある人がいて、その人が、自分は一度死んでみたが、死んだ後には何もなかった、と教えてくれたならば、死後には何もなかったことが分かる。しかし、そういう人がいないのに、どうして死後には何もないと分かるのか。

地獄はある。地獄を恐れることから、善行は生まれる。南無地獄大菩薩。